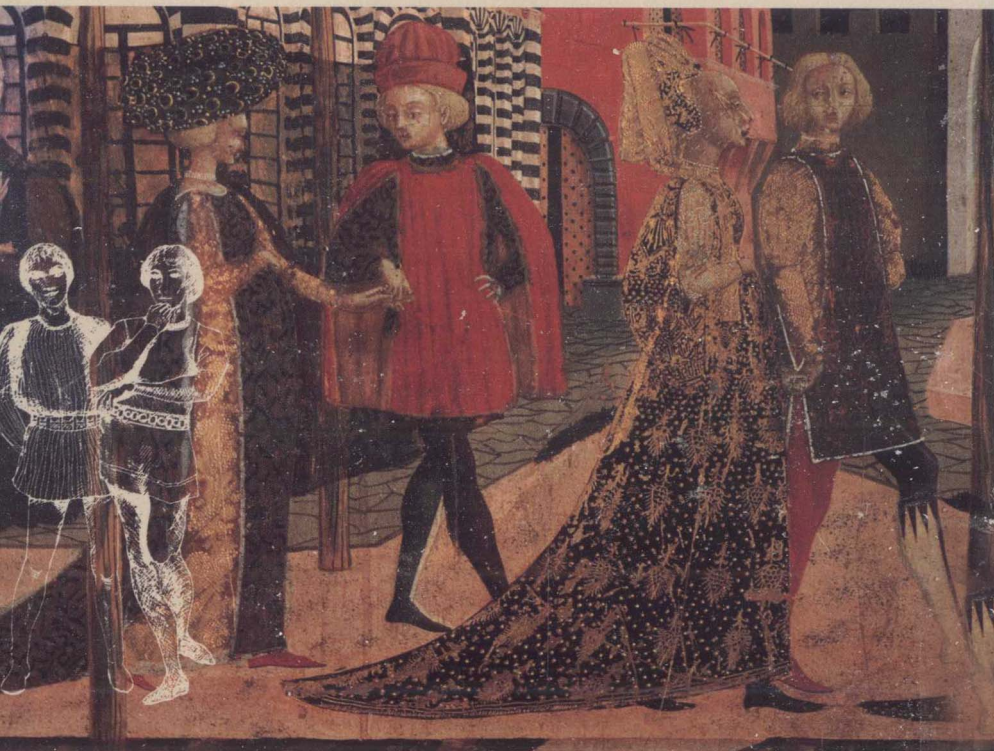


デジデリオ

1464、フィレンツェの遺言

ラビリンス

森下典子



デジデリオ

1464. フィレンツェの遺言

ラビリンス

森下典子



デジデリオ ラビリンズ
1464・フィレンツェの遺言

一九九五年 四月三〇日 第一刷発行

著 者 森下典子

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―二〇

郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三三三〇―六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇―六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社／錦印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

ラデジデリスオ

1464 ベン・ハンス・ファン・デル・ヴェーデル

装幀——中谷 匡児

絵——かすゆきみえこ

主な登場人物

デジデリオ・ダ・セッティニャーノ（イタリア・ルネッサンス期の彫刻家）
アントニオ・ロッセリーノ（デジデリオの友人、彫刻家）

ベルナルド・ロッセリーノ（アントニオの兄、建築家）

ポルトガル枢機卿（ポルトガル王家出身の聖職者）

ルビー（デジデリオの同性愛の恋人）

レオン・バッティスタ・アルベルティ（ルネッサンス期の思想家）

クリストフォロ・ランデイーノ（アルベルティの親友、ラテン語学者）

第一章

旅のはじまりは、一九九二年四月二十五日だった。

その朝、私は東京発七時十五分の新幹線で、編集者やカメラマンと一緒に京都へ向かった。京都市北区にある喫茶店に到着したのは、ちょうど午前十一時。私たち一行がどやどやと入っていくと、奥のテーブルで、白い顔がこちらを振り返り会釈した。

私はたわいもない空想をすることはあっても、実際にはこの目で見たもののしか信じない質の間である。これまで、霊感や超常現象というものを体験したことはいし、UFOを見たこともない。「UFOを見た」などと聞いた途端、どこからかスーッと胡散くさい風が吹き込んできたような気がして、急に相手が信用できなくなってしまう性分なのである。

よりによって、そんな私に「家庭画報」の編集部から、

「京都に、人の前世が見えるという人がいるんです。その人に前世を見てもらって、ルポを書きませんか？」

という電話がかかってきた。

「前世?……」

フフンと軽く鼻先で笑った。

前世が見える人がいるなどということ自体、私が真に受けるわけがない。信じる信じないの問題以前に、それはただの遊びにしか思えなかった。

そして、自分の前世は一体何だったと言われるのか聞いてみたいという興味が沸いた。

子供の頃、母からこんな話を聞いたことがある。

私が産まれた時、母の枕元で眠っている乳呑み子の私をのぞいて、近所の人たちが噂し合った。「不思議だねえ。この子、義雄ちゃんにそっくりだ。きつと義雄ちゃんの生まれ変わりだよ。義雄ちゃんが帰ってきたんだよ」

義雄というのは、父の弟だ。戦争から復員してすぐ、二十一歳の若さで病死した、祖母の一番自慢の息子だ。私はその叔父の顔を、古い写真でしか知らない。

「私が、写真の叔父さんの生まれ変わり?」

「近所の人たちは、そっくりだって、言ってたわ」

その話を聞いた時、幼な心を感じた不思議な気持ち覚えていた。自分の命は誰かの命と、どこかでつながっているのかという、ほんのりと温かいものに包まれるような感覚……。

果たして、人間は本当に生まれ変わるものなのだろうか。真実は、誰にもわからない。私は、

時たま空想してみることがあった。

「もしも、私が本当に誰かの生まれ変わりなのだとしたら、昔、私はどこで、どんな人生を送っていたのだろうか」

と……。

私は、京都行きを引き受けた。それは、街角で占いをしてもらうのと同じような気分であった。

喫茶店の奥のテーブルですつと立ち上がった彼女は、小柄だが、亡くなった作家の森瑤子さんか、デザイナーの花井幸子さんのように華やかに見えた。

宗玄松子^{そうげんしょうこ}さん、四十六歳。紺色のミニドレスで、髪は明るい栗色のマッシュルームカット。色白で雛人形のように日本的な顔立ちだが、下瞼のまつげの際にくっきりと引いた黒いアイラインが、古代エジプトのまじない師のそののように妖しく見えた。

挨拶や名刺の交換が済むと、私は彼女の隣に腰掛けてノートをひろげ、いつものようにインタビューを始めた。

——宗玄さんが生まれたのは静岡県伊東。家は裕福で、弁当屋を手広く営んでいた。彼女は三歳から松竹映画に子役として出演し、高峰三枝子の子供役などを演じた。子供心に、

「なんで他の子と違うことをしなきゃならないんだろう」

と思ったこともあるが、まわりにいつも、佐田啓二、美空ひばり、坂口安吾、高見順など、映画スターや作家という華やかな人々がいて可愛がってくれるのが嬉しかった。映画「黒船」の撮

影で来日したジョン・ウェインにも会ったことがある。

その頃の彼女が他の子供と変わっていたことと言えば、トップスターの体のまわりに、いつも真っ白い光が巻きついて見えていたことだった。それが大勢の人の中にいても、真っ白く光って見える。ところが中には、胸や足元に、蛇のような黒い影がまつわりついている人がある。そういう人は、なぜか事故や病気で亡くなったり、不運にまわられた。けれど、彼女はそれが自分の特殊な能力だとは気付いていなかった。

ある人に勧められて中国の五経の一つである「易経」^{えいきやう}を読み、四柱推命の勉強を始めたのは、十八歳の時だった。京都にある美術系の短大に進学して日本画を学び、二回生の時、京都の老舗の跡継ぎと結婚。二人の女の子の母になった。今では娘二人も成人し、彼女は空間デザイナーの仕事をしている。

奇妙な映像が見えるようになったのは、三十代半ばのある日であった。時々、目の前にいる人の姿に何かの残像のようなものがかぶさって見える。

「最初は乱視になったのかと思った」

という。しかし、どうやら、ただの乱視ではなかった。昔のパリの市民が見えたり、中国の商人や、武士が見えたりする。耳なりのように、声や音が聞こえる時もある。自分は病気ではないかと心配したという。

しかし、そういうことを何度か経験するうちに、はっきりと、映像はその人の「前世」の姿なのだと思うようになった。子供の時、スターの体のまわりにいつも真っ白い光が見えたことを思

い出した。あの能力が、四柱推命の修業を長年続けてきたことで磨かれたのだろうと彼女は自分なりに解釈した。

しかし、友達はみんな、

「前世だなんて、また、そんな夢物語みたいなこと言ってる……」

と嗤う。だから、最近ではあまり口にしない――。

しばしば話の本筋から逸れながらも、宗玄さんは何時間も語った。大きな四角いトルコ石の指輪をはめた白い指先では、いつも煙草の細い煙がゆるゆると立ちのぼっている。そして、彼女は不意に、まるで同じ話の続きのような、実に何気ない声で、

「あなた、外国人やったんやね」

と、呟いた。私はメモを取る手を止め、顔を上げた。

「外国人って、……私が、ですか？」

彼女は指先で落ちそうになっている煙草の灰を払おうともせず、テーブルにじっと視線を落としたまま黙って領いた。下瞼のアイラインがひとときわくつきりと見えた。いよいよ「前世」の糸口がほどけ始めるらしい。編集者とカメラマンが素早く視線を交わし、私は全身を耳にして、

「外国人って、どこの国の人だったんですか？」

と、身乗り出していった。

「こうして並んでいて、さっきからあなたの霊波をとっているんだけど……船で来たんやわ。あなた、前世は中国のお坊さん、学僧だったね」

「……ということは、私は前世で男だったんですね？」

「そう、あなたはズーっと、男だった……唐の時代、それも一番栄えた盛唐の時代やね」

彼女は、こちらの質問の受け答えをするよりも、見えることを先に話したがっているようだった。たずねたいことはいっぱいあったが、今は見えている私の前世について、そのまま聞き続ける他ない。

「鑑真和尚の弟子と一緒に、船で大陸から渡ってきてるね」

「鑑真和尚」とは、奈良にある唐招提寺の開祖で、天平時代、日本に仏教の戒律を伝えた中国唐代の高僧である。日本への航海のたびに時化で難破すること五度。六度目にやっと鹿児島県坊津に到着するまでに十二年の歳月がかかった。その間に三十六人の弟子を失い、日本に着いた時には自らも失明していた。

「あなた、なにせ唐招提寺に深いゆかりのある人よ。……文章も書いてるけど、しょっちゅう絵も描いてはる。へえ、絵うまかったやん」

関東弁と京都弁が混ざり合う。彼女の目は、私に見えないモニターテレビを凝視しているようでもあるが、でたらめな思いつきを並べているだけのようにも思える。

私は修学旅行の時、唐招提寺で見た「鑑真和尚坐像」を思い出そうとした。前世で一緒に辛い船旅をした仲だったら、鑑真和尚の顔に、かすかな心当たりくらいあってもよさそうな気がする。しかし「鑑真和尚坐像」の顔そのものが思い出せない。何だか、「かつおぶし」のように煤けた木の像だったような気がするが……。

「どうです、森下さん。中国人の前世に思い当たるものはありましたか？」

東京へ帰る新幹線の中で、編集者が缶ビールを片手に探りを入れてきた。私は、

「ぜんぜん」

と、そっけなく首を横に振って、二本めの缶の栓を開けた。

「まったく、ぜんぜん、ですか？」

彼の表情が、言葉の柔和さとは裏腹に一瞬険しくなった。原稿にならないなんて、ナシですよ、と目で釘を刺してくる。私は少し口ごもった。

「……そりゃ、無理やり結びつけようと思えば、日本人は誰だって一つや二つ、中国と結びつくとは思うけどさ」

実をいうと、私は高校時代から、漢詩の中でも唐詩、とりわけ盛唐の詩に心酔していた。好きな詩人は王維^{わうい}。私の本棚には「唐詩選」が並んでいる。中国の染付けの陶器にも惹かれるものがあり、部屋には「蓮」と「孔雀」を描いた景德鎮^{けいとくちん}の大きな瓶が二つ並んでいる。

そして私はなぜか、たびたび中国人から「中国人」に間違えられる。

「アナタ純粹ノ日本人ジャナイヨ。中国人ノ血ガ入ッテルヨ。雰囲気デスグワカル」

などと、親しげに声をかけられるのだ。

「それに、森下さん、ほら、船にも縁があるじゃないですか……」

編集者が指摘したのは、以前、イラン・イラク戦争下のペルシャ湾を取材するために、タンカ

ーに同乗したことだ。

けれど、唐詩が好きで、時々、中国人に間違われることがあり、船に乗ったことがあるから、
どうだというのだろう……。

「そんなことで、私は鑑真和上と一緒に船で中国から渡ってきたんだ、なんて本気にすると思う？」

と、口を尖らすと、彼は、

「そりゃもちろん証拠にはなりませんけど……でも、たとえばですよ、森下さんが今日、宗玄さんから言われたことを、そっくりそのまま僕が言われても、僕には、今、森下さんがしゃべったような心当たりすらありませんよ。それって、不思議じゃないですか？」

と、とりなすような声になった。

その晩のことだった。時刻は十二時をまわっていた。ベッドでうとうとしていると、ファクスの呼び出し音が二回鳴った。カタカタカタと送り出されてきたのは、宗玄さんからの手紙だった。「あとで突然、レム状態になって、その日に会った人の前世がものすごくはっきり見えることがある」

というので、帰り際に、

「うんと具体的なデータが欲しいから、何か見えたら、何時でもいいからファクスしてください」

と、頼んでおいたのだ。ファクスの手紙にはこう書かれてあった。